家をニワトリたちでいっぱいにする

ある朝、インドの田舎で、スマティはウシの乳搾りを終えた後、湯気の立つチャイを手にして簡易ベッドの上にくつろいで、これからの長い一日の農作業の前に数分の間、静かに内省しようとしていました。彼女は窓の外のウシ小屋の向こう、遠くに茂っている麦の列の方を見詰めています。もやが緑の茎から立ち上り、太陽がちょうどその壮大な存在を地平線に現し始め、アマランスの植物の火のような赤い先端を明るく照らしています。スマティの夫はニワトリの世話に出ており、スマティはこの静かな瞬間、自分だけの時間に深い感謝の念を感じていました…

ギーッ！ ドスンドスンドスン… 寝室のドアが音を立てて開き、重い足音が彼女の方へ向かって来ます。

スマティは「おはよう！」という声を聞きました。彼女の夫のいとこのサンデャが部屋に入って来ました。サンデャは農業を学ぶために彼らの所に滞在しています。彼女の滞在はほんの数週間のはずだったのですが、数カ月に延び、すぐには出て行くつもりはないようでした。スマティが答える前に、サンデャは続けました。「そのチャイはおいしそうね。私も一緒に1杯飲ませて！」いとこは台所にカップを取りに行き、皿をガチャガチャ鳴らしました。

サンデャが簡易ベッドの上に居座ると、スマティは弱々しくほほ笑んで窓の外を見ました――独りでいたいということをはっきりと示して。

しかし、サンデャは全くそれに気づきません。その代わりに、今見たばかりの夢の話を始めました。スマティはほんの少し前に、なぜ深い感謝の念を持っていたのか、もはや思い出すことが

できません――その気持ちは、今や遠い記憶でした。彼女は憤りという新しい感情でいっぱいになりました。

チャイを飲み終えるとすぐに、スマティは助けを求めようと決心しました。彼女は、隣の農家に住むガーヤトリー・アンマという賢い女性を訪ねることに決めました。スマティは農業の助言を求めてガーヤトリー・アンマの所へよく行っていましたが、彼女の知恵は農地についての知識をはるかに越えていたのです。実際、ガーヤトリー・アンマは神への献身に没頭しており、村人たちは彼女の日々の神の体験を聞くために訪問していました。

スマティが生い茂ったコムギ畑を横切ってガーヤトリー・アンマの農場へ向かうと、彼女はベランダの掃いたばかりの土間に座っていました。

ガーヤトリー・アンマは見上げて言いました。「スマティ、何と素敵な驚きでしょう！ そしてこんな早朝に! どうしたの？」

「もう我慢できません」と、スマティは言いました。「私は夫を愛しています、でも…」と、彼女は付け加える前に間を空けました。「彼のいとこが！　彼女が家の中でとても大きな場所を占めているのです。彼女はいつも私の邪魔をしているような気がして、いつも私を煩わすのです。どうしたらよいでしょうか？」

ガーヤトリー・アンマは、彼女の言葉を理解し、そしていたずらっぽく目を輝かせて片方の眉を上げました。

「あなたはニワトリを持っているの?」と、彼女は答えをよく知りながらも、スマティに尋ねました。

「はい、もちろん」

「家をあなたが持っているすべてのニワトリでいっぱいにしなさい」

スマティはこれは少し奇妙に聞こえるとは思いましたが、ガーヤトリー・アンマを信じているし、他にすべきことも本当に分からなかったのです。隣人にお礼を言って、真っすぐニワトリ小屋へ行きました。そこでは夫が籠に卵を集めていました。

「ナレーシュ」と、スマティは彼に言いました。「ニワトリを全部家に入れなければならないのです」。彼は彼女をいぶかしげに見ましたが、彼女が実際に真剣なのを理解する前に、彼の妻はニワトリ小屋からコケッコケッと鳴いているニワトリをすくい上げ、家の中へ運びました。

翌朝、スマティがチャイを飲みながら簡易ベッドに座っていると、数羽のニワトリが彼女の方へさまよって来ました。彼女はコケッコケッコケッという鳴き声を聞き、脚をコツコツコツとつつかれ、痛みを感じて跳び上がりました。

そこで彼女は、義理のいとこのおなじみのギーッ！ ドスンドスンドスンを再び聞きました。しかしサンデャがおはようという前に、スマティはドアの外に出て、ガーヤトリー・アンマの家へつかつかと歩いて行きました。

ガーヤトリー・アンマがドアを開けました。「おはよう！ 問題は解決したの？」

「いいえ、もっとひどくなりました！ 独りでチャイを飲もうと座ったその時に、ニワトリたちにコケッコケッと鳴かれ、脚をつつかれ、邪魔されたのです！」

ガーヤトリー・アンマがほほ笑みました。「あなたはヤギを飼っているの？」

「はい」

「あなたが飼っているすべてのヤギを連れて来て、あなたの家の中に入れなさい」

スマティには、それが彼女の状況にどのように役立つのか想像することもできませんでしたが、ガーヤトリー・アンマには実に確信があるように見えました。ですから、スマティは放牧地に行き、ヤギの群れを先導し、すべて彼女の居間の中に移動させました。そこでは、ニワトリたちが敷物をくちばしでつついていました。

明くる朝、スマティがベッドから起き出す前に、彼女は騒々しいメエエエエエ、メエエエエエ、メエエエエエで目を覚ましました…ヤギたちです！ 彼女がヤギたちを押しのけて台所へ行こうとすると、ヤギたちは彼女のシャルワールというパンツをかみます。彼女がチャイを作っていると、コケッ、コケッ、コケッを聞き、コツコツコツと脚をつつかれ、そして、まさにその時、ギーッ！ドスンドスンドスンを聞きました…

あたかも爆発するかもしれないと感じながら、彼女はドアを走り出て、畑を横切ってガーヤトリー・アンマの家に向かいました。

ガーヤトリー・アンマがまたもや、「問題は解決したの？」とあいさつしました。

「いいえ！ さらにもっとひどくなりました。自分自身の家の中で私の居場所がほとんど無いのです！」

「ああ！ あなたはイヌを飼っているの？」

スマティは両手で頭を抱え、次に何が来るのかを知っていて、うなずきました。

「イヌたちを全部連れて来て、あなたの家をいっぱいにしなさい」

スマティは、彼女の友人が言ったようにしながらも、その一方で、次第にガーヤトリー・アンマの知恵を疑い始めていました。

翌朝、またもや最悪な事態になりました。コツコツ、コケッコケッ、メエエメエエ、ワンワン、それに、ギーッ！ ドスンドスンドスンと訳の分からない不協和音が、耳中にいっぱいになりました。もっと最悪なことには、彼女はあらゆる方角から取り囲まれたような感じがしたのです。彼女は自分の家に住んでいる生き物たちの中で、ほとんど身動きできませんでした。

スマティは、つついているニワトリたち、落ち着きのないヤギたち、ほえているイヌたち、そして、いつもいるいとこを押しのけて、もう一度、ガーヤトリー・アンマの家に向かって行きました。

今度は、ガーヤトリー・アンマがドアを開けると、スマティは切羽詰まって彼女を見ました。「私はここに助けを求めてやって来たのです。それなのに、事態はもっとひどくなっただけです！」と、彼女は言いました。

ガーヤトリー・アンマは冷静なままで、彼女の声は安定していました。「聞きなさい、スマティ。すべてのニワトリ、すべてのヤギ、すべてのイヌ…それらを家の外に出して、ドアを閉めなさい」

スマティはうなずき、家に戻りました。彼女が畑に向かっているドアを開けると、1羽ずつ、1匹ずつ、動物たちは嬉しそうに外に出て、慣れ親しんだ家畜小屋の方に移動していきました。

彼女の夫もいとこも、簡易ベッドの上に残り、静かにチャイをすすり、朝ごはんのビスケットをサクサクサクと食べていました。スマティは、ドアの脇に立って、彼女の家族とほとんど空っぽ

になった家を眺めました。そこには、空間がありました、たくさんの空間が！　居間で朝食を食べている静かな音にもかかわらず、ひんやりとした静けさの波が、彼女に押し寄せました。

歌をハミングしながら、スマティはもう一度ガーヤトリー・アンマの家の方に向かって、畑を通り越して歩いて行きました。風が彼女の顔をくすぐり、暖かな太陽の日差しを肩に感じます。

ガーヤトリー・アンマはドアを開けて、彼女を物問いたげに見詰めました。

スマティはほほ笑んで言いました。「ありがとう！　ありがとう！　本当にありがとう！　あなたは、私の問題をすべて解決してくれました！」

© 2020 SYDA Foundation®. 著作権所有。